



Data

監督: 鈴木雅之
 原作: 東野圭吾『マスカレード・ホテル』(集英社文庫刊)
 出演: 木村拓哉/長澤まさみ/小日向文世/梶原善/泉澤祐希/東根作寿英/石川恋/濱田岳/前田敦子/笹野高史/高嶋政宏/菜々緒/生瀬勝久/宇梶剛士/橋本マナミ/田口浩正/勝地涼/松たか子/鶴見辰吾/篠井英介/石橋凌/渡部篤郎

👁️👁️ みどころ

殺人犯逮捕のために人を疑うのが刑事。お客さまを信じ、仮面を剥がないサービスを提供するのがホテルマン。両者は水と油だが、フロント係として潜入捜査をする命令を受けたキムタク扮する敏腕刑事が、長澤まさみ扮する優秀なホテルクラークの指導よろしきを得て、大変身!“推理モノ”としてより、凸凹コンビの師弟モノとしての、丁々発止のやりとりから学ぶ人生訓が面白い。

一流ホテルにもかかわらず、イチャモンづけ、ストーカー逃れのストーカー等、客はヘンなヤツばかり。盲目のお客さまへの対応はとりわけ難しいが、そのサービスのあり方は・・・?

ネタ切れ状態の邦画界で、またまた東野圭吾の人気シリーズの映画化だが、TVドラマの劇場版的面白さは十分。お正月にはちょっと豪華な仮面舞踏会の雰囲気味わいながら、キムタクと共に犯人捜しを・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■またまた東野圭吾の原作が映画化！ダブル主演は？■□■

チラシには『ガリレオ』『新参者』に続く、新HERO誕生 東野圭吾、新たなる傑作ミステリーが遂に始動!!”と書かれている。本作は、累計300万部突破の東野圭吾作品屈指の人気を誇る「マスカレード」シリーズの第一作「マスカレード・ホテル」が発売から7年の歳月を経て、待望の実写映画化!されたものだ。東野圭吾の原作は「ガリレオ」シリーズ、「新参者」シリーズをはじめ、直近では『人魚の眠る家』(18年)等が次々と映画化されているが、「マスカレード」シリーズの映画化は本作がはじめてだ。

本作では、『検察側の証人』(18年)、『シネマ42』(41頁)で検事役を演じたキムタクこ

と木村拓哉がはじめて刑事役を、他方、今や女盛り(?)になった長澤まさみが都内屈指のホテル・コルテシア東京の優秀なフロントクラーク役を演じて、W主演を果たしている。もっとも、W主演といってもこの2人は恋人同士ではなく、刑事として“人を疑う”のが仕事である新田浩介(木村拓哉)とホテルマンとして“人を信じる”のが仕事である山岸尚美(長澤まさみ)は、最初から敵対関係・・・?もっとも、潜入捜査のために刑事から一時的にホテルマンに化けた新田は尚美が指導係とされていたから、その上下関係は明白。新田は尚美の指導よろしきを得て、少しずつ態度も言葉づかいも上品になっていくが、その本質は・・・?

これだけ東野圭吾原作の映画化が続くと、邦画のネタ切れ現象の危機感が強いが、なるほど、この組み合わせ、この対立関係なら、わかりやすく面白そう・・・。

■□■推理小説の面白さよりも、凸凹コンビの面白さに注目!■□■

私は原作を読んでいないが、推理小説としての面白さや奥深さの点では、いかに東野圭吾の原作と言ってもコナン・ドイルやアガサ・クリスティの推理小説にはかなわないはず。警視庁捜査一課が刑事を総動員して都内の一流ホテル「ホテル・コルテシア東京」で潜入捜査をさせたのは、第4の殺人事件がここで起きること間違いなしと判断したためだ。都内で起きた3件の殺人事件にはすべて不可解な数字が羅列されていたが、その数字が次の犯行場所を予告していることを解読したのは、警視庁捜査一課のエリート刑事の新田。なるほど、この設定は面白そうだが、その数字が緯度と経度を指すというのはちょっと安易すぎ・・・?

本作では、ホテルのフロントに立ちながら終始目つきの悪い顔で客を疑い続ける新田と、お客様へのサービスが第一と考え、常に笑顔で接するフロントクラークの尚美との「凸凹コンビの妙」が売りで、それがピッタリとツボにハマっている。「師弟モノ」の名作は多く、『スパイゲーム』(01年)はCIAのスパイとしての「師弟モノ」だった。それに比べると、本作はあくまで推理モノ、潜入捜査モノだが、新田が尚美の薫陶よろしきを得てホテルのフロントマンとして成長していく過程と、犯人逮捕に至るプロセスが重なっているため、推理モノとしての側面よりも、尚美と新田の師弟モノとしての側面が面白い。

一流のホテルマンになるためには、①言葉遣い、②身だしなみ、③いつも笑顔での他、④客(ではなくお客様)への対応のあるべき原則がある。さらに、総支配人の藤木(石橋凌)も尚美も「お客様の仮面をはがしてはならない」が基本ルールであることを再三強調しているが、本作を観ているとそのルールの重要性がよくわかる。したがって、本作は犯人捜しの推理モノとしてはイマイチだが、ホテルマンの成長物語という師弟モノに尚美と新田の凸凹コンビの掛け合いの面白さに注目したい。

■□■ヘンな客が次々と!一流ホテルのサービスとは?■□■

近時の邦画はTVドラマの“劇場版”のようなものが多い。本作もその一つだが、ここでは多くの登場人物のキャラをわかりやすく突出させてみせる必要がある。そのため本作では、ホテル・コルテシア東京を舞台として、①刑事側と②ホテルマン側をくっきり色分けしたうえ、③犯人は誰だ？という推理モノの基本線を貫くべく、怪しげな客を次々と登場させていく。刑事側のキャラもホテルマン側のキャラもみんなわかりやすいから、一度登場すればすぐにその位置づけが理解できるが、唯一謎めいたキャラを振りまくのは、刑事の能勢（小日向文世）。彼はあくまで新田の元相棒にすぎず、現在の潜入捜査のチームにも入っていない。ところが、なぜかこの男が“犯人”逮捕に向けて大きな役割を果たすので、それに注目！

他方、“犯人捜し”という観点からは、次々に登場する“ヘンな客”のキャラをしっかり分析し、その本性をとらえる必要がある。本作には“ヘンな（宿泊）客”として、①禁煙の部屋を予約していたのにタバコのおいがした、とイチャモンをつける客（濱田岳）、②あらゆることに言いがかりをつけて、新田をとことん苦しめる客（生瀬勝久）、③「ストーカーの男を近づけないで」と命じて宿泊しておきながら、実は彼女こそがストーカーだったという客（菜々緒）等が次々と登場する。その結果、尚美ですら、絶対にしてはならない“客のルームナンバーを教えてしまう”という初歩的なミスを犯してしまうことに……。

そんな中、新田はとことんイチャモンをつけ続ける客にどこまで我慢が続けることができるのか？“映画だから”という前提ながら、新田の我慢強さには感心させられるとともに、もし俺がホテルマンの立場だったら……、と思うと、とてもとても……。

■客のワガママは何でも！それが一流ホテルのサービス？■

世の中には、禁煙の部屋に入り自分でタバコに火をつけて、前の客がタバコを吸っていたとイチャモンをつける客がいるらしい。それによってよりグレードの高い部屋へ移ることをたくらむそうだが、尚美はそんな客に対して、ドンとスイートの部屋を提供。そして、これがあるべきホテルのサービスと説明していたから、ビックリ。また、ホテル側が身障者の客に対して細心の注意を払うべきは当然だが、身障者（盲目）を装っている客（松たか子）に対しても、その仮面をはがさないサービスが大切だというから、それにもビックリ！

潜入捜査のためフロントクラークに化けている新田に対して、トコトン嫌がらせを続ける客については、そんな一流ホテルのサービスが結果的に実を結び、“客の反省”という形で決着がついたのは喜ばしい限りだ。しかし、他方で盲目を装った女性客については、その仮面をはがさないサービスを続けた結果、尚美は重大な危機を迎えることに……。

やはり、ほどほどは疑うことも、拒否することも必要なのでは？弁護士は「依頼者の話を一方的に信じてはいけない」という観点からは、刑事と同じように疑うのが仕事。他方、「依頼者の話を聞き、信じてあげなければならない」という観点からは、ホテルマンと同

じように信じるのが仕事だ。そのため、弁護士には刑事タイプの、“疑い深く仮面をはぎたがる弁護士”と、ホテルマンタイプの、“依頼者を信じ仮面をはがさないように努力する弁護士”の2種類がある。私はどちらかというと前者、すなわちホテルマンタイプではなく、刑事タイプだ。そのため私は一流ホテルのホテルマンの理想的なサービスの在り方はよくわからないが、本作を観ていると、いろいろと考えさせられることに・・・。

■ ■ 「マスカレード・ホテル」なる命名は如何なもの？ ■ ■

『オペラ座の怪人』(04年)は有名なミュージカル映画(『シネマ7』156頁)、かつ演劇(『シネマ2』241頁)。2018年7月13日に死亡した浅利慶太が創設した「劇団四季」の得意ネタとしても有名だ。ミュージカル『オペラ座の怪人』には有名な曲がたくさんあるが、その一つが「マスカレード」。マスカレードとは「仮面」のことで、この曲は豪華な仮面舞踏会に集った多くの紳士淑女によって大合唱される。東京の渋谷では2018年10月27日深夜ハロウィンで仮装した若者たちの大暴走が社会問題になったが、参加者が仮面をつけドレスとタキシード姿で舞踏会で集まる「仮面舞踏会」の起源は、中世後期のヨーロッパ宮廷にある。仮面舞踏会は15世紀のルネサンス期のイタリアで人気となり、17～18世紀にはヨーロッパ全土の宮廷で大人気になった。そんな盛り上がりだったから、オペラ座の地下深くに住んでいた「怪人」もクリスティエヌらが参加する仮面舞踏会が気になったらしい。

「マスカレード・ホテル」シリーズは東野圭吾の人気シリーズだが、なぜそれは「マスカレード・ホテル」と命名されているの？ホテルの客はみんな仮面を被っているが、ホテルのサービスとして、その仮面をはがすのは厳禁。それがホテルマンの「大原則」だが、そんな大原則を逆手にとって、殺人犯が仮面をつけているところが本作のミソだ。しかし、そうかといって、都内の一流ホテルを「マスカレード・ホテル」と命名するのは如何なもの？私は本作を鑑賞しながらずっとそう考えていたが、本作では結局大きな仮面を被った犯人が逮捕されたから、妙に納得！しかし、すべての事件が解決し、新田が再びフロントクラークから刑事に戻った後、尚美が仮面をつけた艶やかなドレス姿で登場し、新田と共に食事をするシーンをみていると、これをどう解釈すればいいの？まさかこの2人が現実の木村拓哉と工藤静香夫妻のように、今後、幸せな家庭を築く第2幕が待っているわけではないだろうが・・・。

2018(平成30)年12月27日記